

# 断片紡ぎ思いに迫り

「半袖、半袖」。そう言われて50代の男性がふらりと現れた。知的障害者が暮らす入所施設「進和やましろホーム」(平塚市)。取材に入った記者が、事務室で施設長の山岸直道さん(51)から説明を受けている。

## やまゆり園 事件は問う 施設は今

山岸さんが男性に向き合った。「本当(に求めて)いる」とは何?」返ってきた言葉は「パジャマ」。夜に着るパジャマを半袖にしたのだと見立てた山岸さん

## 支援の現場

んが担当職員に言いつつ「お」に忘れると、男性は少しほほ笑み、すっと出て行った。やましろの入所者は60人。自らの意思を言葉で明確に伝えられる人は少なく、手掛かりは断片的な言葉だったり、表情や行動だったりする。職員はそれらを基に洞察を重ね、その人の思いを探っていく。



夜勤の時間帯の打ち合わせを行う職員ら＝4月、平塚市の進和やましろホーム

職員らは口々に意思疎通の難しさを悩みに挙げた。キャリアが長い山岸さんでさえ「周囲から『それはあなたの主観でしょ?』と言われる、悔しいときもある」と打ち明けた。

仕事の喜びと表裏の関係でもある。職員らが口にしたやりがいもまた、通じ合えたと思えた時の手応えだった。

21面に続く

「やまゆり園事件は問う」は、知的障害者の暮らしの場を巡る課題を伝えています。今回は実際に入所施設内に入り、重い障害がある当事者の暮らしや、施設が直面している支援の困難さについて、現場から考えます。

# 集団と個のジレンマ

1面から続く

## やまゆり園 事件は問う 施設は今

「ゆいゆい食べてくださいね」。4月のある朝、知的障害者が暮らす進和やましろホーム(平塚市)。職員の間には歩き回ったり、大きな声を出したり、床にしゃがみ込んだりする人もいる。

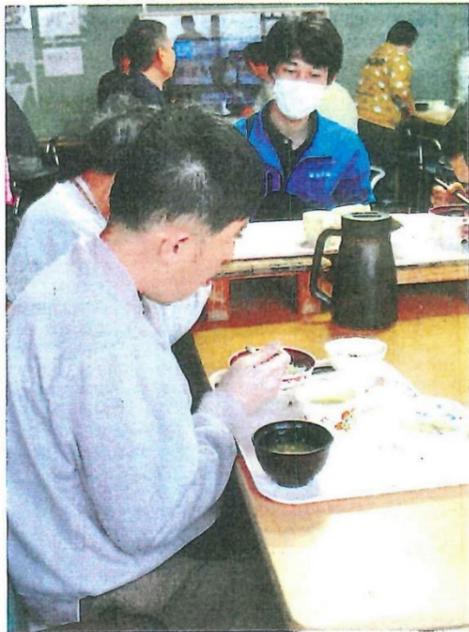
う。栗山さんは「ご飯の時間帯は生死に関わる。一番気が抜けないです」と話す。1日3回の食事と毎日の入浴、日中活動…。やましろの1日は入所者の日課を中心に回り、職員はその合間に記録作成や情報共有、会議に臨む。

## 「こだわり」

入所者は50〜60代が大半で、入所期間が20年以上の人が8割超。必要な支援の度合いを示す区分は、最も高い

## 支援の現場から

朝食の様子。利用者がむせたり、喉に詰まったりしないよう職員が見守る＝4月、平塚市の進和やましろホーム



『やまゆり園事件は問う』では、事件が突き付けた課題について足元から考えます。ご意見をお寄せください(メールは、fukushi@kanagawa-np.co.jp)。

「6」が7割超を占める。中には水滴が気になって拭き続けたり、コード類を引っ張ったり、独特なこだわりがある人も多い。意思がうまく伝わらない場合に自分の腕をかむ自傷や、他害行為に及んでしまう人もいる。

## 「普通」とは

職員の膨大な情報共有し、特に見守りが必要な人にはマンツーマンで付き添うが、集団生活の中では一人一人の特性に応じた支援が難しい。シレンマを抱える個々のこだわりがぶつかりあったり、優先度をつけて対応しなければ日課が回らない場面がどうしても生まれる。

は「60人だろが、5人だろうがその難しさは変わらないと思う。本人のためにもっと何かができると思えば、いくら人がいても足りない」と支援の難しさを口にする。

(山本 昭子)

## 県内施設の声

- 障害の特性がさまざまな人を集団で支援する難しさを感じる
- 利用者の高齢化に伴う身体機能の低下、通院や医療的ケアの増加など、支援・業務の幅が広がっている
- 利用者支援が最優先だが、書類作成や会議に時間がとられてしまう
- 改修や建て替えが必要だが、資金調達のめどが立っていない
- 新型コロナを巡り、一般的な対策が難しい。マスク着用ができず、窓を開ければ利用者がすぐに閉めてしまう

※本紙アンケートから